美術教育の背景としての
マレーシアの美術と美術家について（1）

福　田　隆　眞

On the Art and Artists as Art Education in Malaysia: part 1

FUKUDA Takamasa

(Received September 26, 2008)

はじめに

筆者はマレーシアの美術教育に対して調査・研究を進めてきた。(1) それは主として学校教育と教員養成を対象として、教育課程のレベルでの文献調査と美術教育の実際である教育実践の調査・研究である。こうした美術教育の背景には社会における美術の世界が存在している。そこには伝統的美術表現と創造的美術表現の併存、伝統文化と欧米の影響、融合、調和などによる美術表現と表現方法の多様性が認められる。

美術教育の教育内容を考える場合、伝統的内容と現代的内容の取り扱いや社会における美術の動向などを考慮して、教育内容の充実を図ることが可能である。そうした美術教育と美術の関係の一例としてマレーシアを対象に考察する。

マレーシアでの伝統的美術はそのほとんどが工芸作品であり、今日の西欧の純粋美術とされる分野が認められるのは、イギリス植民地からの最終期であり、1930年代以降である。

アジアの多くの国々の美術は西欧の枠組みとは異なり、純粋美術の概念は植民地後に概念が移入された。伝統的美術としては工芸作品が主でありそれは生活や社会に適応するための機能表現であった。今日、純粋美術とされる絵画、彫刻も適応表現の一環であった。戦後の美術教育はその多くが欧米の教育制度に影響され、美術の概念も欧米の枠組みが採り入れられたのである。そうした状況から、美術教育と美術の関連の一例として考察するために、多文化社会として特徴のあるマレーシアを採り上げ、我が国の美術教育の内容を考察する一助としたい。

本稿ではその１として、独立前後から1970年代までのマレーシアの美術の表現の多様性について、美術家の活動を中心にその変遷について概略を述べ、(2) 美術教育との関連性を試考する。内容の構成としては、1950年代のマレーシア美術の動向、60年代70年代の動向、美術家集団の活動、専門美術教育と教育課程の順で考察を進める。そして、現代の美術と美術家の活動及び美術教育の関連については、機会を新たに報告する。

1　1930年代、40年代のマレーシア美術の変遷

現在のマレーシアは1957年８月31日にイギリスからマラヤ連邦として独立し、その後、シンガポール自治国、サラワク、サバがまとまり、1963年にマレーシア連邦が成立した。そして、

シンガポールがさらにマレーシア連邦から1965年に独立した。

マレーシアのいわゆる純粋美術である近代の絵画の始まりは、1930年代からである。(3) イギリスによる植民地化により、宗主国の社会制度が導入され、インフラの整備や教育の普及によって、近代の絵画も萌芽してきたといえる。この時代では、ペナンがその中心となり、水彩画による現代絵画の活動が始まったのである。

1928年にペナン島でヨーロッパの画家の集まりを「ペナン印象派」と名付け、活動が始められた。そこには地元の画家２名だけが受け入れられていた。アブドゥラ・アリフ（Abdullah Ariff）とその妻であった。その後、1936年に「中国画クラブ」がペナン印象派に対抗して組織された。アブドゥラ・アリフとヨン・ムンセン（Yong Mun Seng）の二人は当時の美術（絵画）の活動を活性化させた画家であった。二人とも地元をテーマとし水彩画の使用に集中した。

この時期に美術家、美術教員の養成の教育機関が設立された。1922年にペラ州にスルタン・イドゥリス教育学院が設立され、美術教育が開始されたが、その内容は手工芸が強調されたものであった。初等教育の教員養成として設置されたものであった。1937年にはシンガポールに南洋美術学院が設立された。ここでは中国からの画家が指導にあたり、彼らは厦門美術学院の出身者であった。(後述)

第二次世界大戦の間はマレーシアにおける美術活動は停止していた。戦後はペナン島で美術の活動が、タイ・フイキー（Tay Hooi Keat）によって開始され、主に美術教員への研修と鼓舞を行った、後に彼は教育省の奨学金でロンドンに1948年に留学した。

この時代のマレーシアの美術の動向は、南洋美術学院の出身者による活躍とペナン島での美術活動が主であり、表現形式も中国画を基礎とした水彩画が多く見られる。

２　1950年代のマレーシア美術の動向

1950年代はマレーシアの美術において栄光へと向かう時代となった。1948年にモハメド・フセイン・エナス（Mohammed Hoessein Enas）がインドネシアからシンガポールを経由してペナン島に到着した。そして人物画によって伝統的な絵画をもたらし、半島美術家連盟を設立し、1958年４月15日にマレーシア美術家連盟（Angkatan Pelukis SeMalaysia）と改称した。

クアラルンプルの美術界では、既に1951年に教育省の下に、ピーター・ハリス（Peter Harris）がイギリスから美術学校の監督者の職についたことを歓迎していた。彼は1952年に画家の組織として、水曜美術会（Wednesday Art Group: WAG）を結成した。

また、ヨン・ムンセンはペナンからクアラルンプルのあるセランゴールに移り、そこで1951年に中国画家を集めてセランゴール美術協会（Kesatuan Seni Lukis Selangor）を結成した。同じ時期の1952年にタイ・フイキーはイギリス留学から帰国し、ペナン美術教師協会を結成した。そこで彼は美術教師に対して指導力を発揮し、講義を行い、美術の基礎としての、形態、色彩、材質感などのいわゆる造形要素と視覚言語について紹介した。

その後、1957年にはペナン島で水曜美術会の理念と同じくして、木曜美術会（The Thursday Art Group）が結成された。そこにはアブドゥラ・アリフ、タイ・フイキー、クオ・ジュピン（Kuo Ju Ping)、リー・ジューフォー（Li Joo For）などがいた。木曜美術会は後の1965年にペナン美術教師協会に再組織された。

マレーシアは1957年にマラヤ連邦として独立し、美術活動も一つの頂点を迎える。1958年には国立美術館（Balai Seni Lukis Negara）が開館し、一般市民への美術の啓蒙、宣伝の機関

となった。このことはマレーシアの美術家に信頼を与えることとなった。

この時代にマレーシアの美術表現は徐々にヨーロッパからの指導者を受け入れ、同時にヨーロッパへの留学生も出現し、西洋美術の表現が移入された。さらには作品発表の場である美術館が開館することにより、美術や美術家に対して社会的価値が認識され始めるのである。

3　1960年代、70年代の動向

1960年代に入り、美術の活動は地元の新聞、テレビ、ラジオに参加することを目的した。著名人による展覧会の開催などが活発になってきた。教育機関としてはクアラルンプルの特別教員養成学院（Maktab Perguruan Ilum Khas）に美術教育のコースが設置され、絵画、彫刻、陶芸、版画、バティック、手工芸の教育が開始された。教員としては、アフマッド・カリッド・ユソフ（Ahmad Khalid Yusof)、チュウ・テンベン（Chew Teng Beng)、イスマイル・ハシム（Ismail Hashim)、ガファー・イブラヒム（Ghafar Ibrahim)、レザ・ピヤダサ（Redza Piyadasa）等であった。

同じく高等教育機関として1967年にマラ工科大学（Institut Teknologi MARA）が設立され、美術とデザインの学科が設置された。それらの学科には、純粋美術、グラフィックデザイン、テキスタイル、金属工芸、陶芸、ファッションデザイン、生産デザイン、美術教員養成のコースが設けられた。教員には、スライマン・エサ（Sulaiman Esa)、ポニリン・アミン（Ponirin Amin)、シャリファ・ファティマ（Syarifah Fatimah)、アヌアル・ラシッド（Anuar Rasid)、アムロン・オマール（Amron Omar)、アワン・ダミッド（Awang Damid）等がいた。他に私学の高等教育機関としては、マレーシア美術学院等が設立された。

60年代のマレーシアの美術家は幸運に恵まれていて、アジア、アオセアニアを始めとして世界各地で展覧会を開催することができた。当時の絵画の傾向は抽象表現主義、ミニマルアート、ポップアート、オップアートなどの傾向が現れてきた。また、1972年にはペナンにあるマレーシア科学大学に人類学コースによる純粋美術の専門が設置された。

60年代、70年代を通じて、外国に留学して純粋美術を修めた多くの美術家が帰国した。そして彼らは教育省のスタッフや特別教員養成学院の教員となった。サイ・アハマッド・ジャマル（Syed Ahmad Jamal)、ヨー・ジンレン（Yeoh Jin Leng)、アンソニー・ロウ（Anthony Lau)、リー・ジューフォー（Lee Joo For)、チェオン・ライトン（Cheong Laitong)、ジョリー・コー（Jolly Koh）等である。彼らはマレーシアの絵画でのアヴァンギャルドの役割を果した。また、70年代初めにはマラ工科大学の教員がこうした役割を果した。こうした現代美術の発展には政治的な要因も影響している。マレーシアが1957年に独立をしたことによって、美術の世界にも自由な作品をもたらした。また政府が美術家を外国に留学させたり、展覧会を開催したりする経済的能力があったことも現代美術の発展に影響をしている。

さらに初代首相が美術の活動を推進したことによって発展がなされた。その後のマレーシアの美術の発展は、マレーシア美術協会の活動、クアラルンプルとペナン島の私学の美術教育高等機関の設立による。美術の発展は同時に政治的、経済的、社会的な発展によるものでもある。

4　美術家集団の活動

マレーシアの独立前後からの美術活動に貢献したのは、前述のようないくつかの美術家集団

と高等教育機関である。美術家集団としては、水曜美術会、半島マレーシア美術家連盟、木曜美術会、マレーシア美術家協会などの活躍がある。これらの美術家集団は設立と再組織をしながらマレーシアの美術活動を支えてきたといえる。以下にそれらの概要につて記す。

(1) 水曜美術会

この組織は有名な画家が属している団体である。ピーター・ハリスによって1951年にクアラルンプルで結成され新しい絵画の世界を開示し、多くの画家に刺激を与えた。この時期、マレーシアではペナン島とシンガポールで絵画の活動が盛んであったので、この団体の結成はクアラルンプルの画家に刺激を与えたのである。彼らのテーマは個人の表現としての美術であり、様々な表現様式を生み出していた。そして印象派と後期印象派の傾向に影響され、既に個人での様式を会得していた。

この団体には以下の美術家が所属していた。ピーター・ハリス、パトリック・ン・コー・オン（Patrik Ng Koh Onn)、チェオン・ライトン、ズルキフリ・ブユン（Dzulkifli Buyung)、サイ・アハマッド・ジャマル、リウ・シアットムイ（Liu Siat Mooi)、ニック・ザイナル・アビディン（Nik Zainal Abidin)、イスマイル・ムスタム（Ismail Mustam)、ザカリア・ノール（Zakaria Noor)、ホー・カイペン（Ho Kai Peng)、プー・ポーフン（Phoo Poh Hoon)、グレイス・スルヴァナヤガム（Grace Selvanayagam）などである。

作家の概略は以下である。

・ピーター・ハリスは1952年にマレーシアの教育省美術教育管理者として来馬した。印象派様式による水彩画で風景画を描き、黄色い色調による画面を得意とした。代表作に「Rumah Rakit」(1956)。

・パトリック・ン・コー・オンは、1932年クアラルンプル生まれで、1966–68年にイギリスのハマースミス美術学校に留学した。ロンドン在住。彼の絵画の主題はバリ島の自然や風習に基づくもので、表現形式もいわゆるバリ絵画のような精密さを持っている。代表作として「Menjemur Kain」(1961)「Menbasuh Kain」(1963）がある。

・チェオン・ライトンは、1932年中国広東生まれで、1937年にマレーシアに移住した。1960年にアメリカ、メーン州のスコヘガン絵画彫刻学校に留学した。その後、ロンドンの美術工芸学校に留学した。彼の作品は抽象表現主義の審美観に基づくものである。代表作として「Main Gasing」(1958)「Merdeka」(1962)「Life, Public and Private」(1965）がある。

・ズルキフリ・ブユンは1948年にクアラルンプルに生まれた。マラ工科大学で美術を修得。印象派絵画の影響を受けた表現により、子どもの人物像と田舎の風景を描いている。常に日常的状況をテーマとしている。代表作は「Kelambu」(1964)「Kapal Kertas」(1966)「Membakar Semut」(1967)。

・サイ・アハマッド・ジャマルは1929年ジョホール生まれ。1949–56年、イギリスのバーミンガム建築大学、チェルシー美術大学、ロンドン大学に留学した。1960年にクアラルンプルの特別教員養成学院の主任教授となった。後にシカゴ美術大学、ハワイ大学に留学し、1975年には国立美術館館長となった。彼の表現活動は、画家、彫刻家、デザイナー、美術教育者、美術評論家など幅広いものである。表現形式は非対象芸術に基づいており、抽象的、象徴的な絵画と彫刻が多い。代表作として、「The Bait」(1959)「The Link」(1963)「Gunung Ledang」(1978)がある。

・ニック・ザイナル・アビディンは1936年にコタバルに生まれた。マラ工科大学で美術を修め

マレーシア放送局でセットデザイナーを務めた。作品の主題はワヤンの多様な表情を追究したものでイラストレーションのような絵画表現が多い。代表作に「Kelantan shadow Puppets」(1959)「Drupadi」(1970) がある。
・イスマイル・ムスタムは1944年セランゴール生まれで政府の英領学校に就学し、マラ工科大学の教員となった。ピーター・ハリスと近似した表現をし、南洋スタイルや中国画を予想させるものがあるが、キュビズム、表現主義に影響された感がある。代表作に「Hendak Mandi」(1958)「Hang Tuah and Hang Jebat」(1961) がある。

(2) 半島マレーシア美術家連盟

半島マレーシア美術家連盟は「半島美術家連盟（Angkatan Pelukis Semenanjung：APS)であり、1956年にマラヤ芸術協会として教員によって組織された団体である。この団体は絵画、音楽とその他の活動を行っており、1957年に数人のメンバーがマラヤの美術家の団体の必要性を感じ、その結果として、1958年にマラヤ芸術協会は解散してマレーシア美術家連盟に代わったのである。

この団体のリーダーはモハメド・フセイン・エナスと幹事のイドゥリス・サラム（Idris Salam)であった。役員は、ザカリア・ノール（Zakaria Noor)、サトゥ・ユスフ（Sabtu Yusuf)、ハビバ・バハルディン（Habibah Baharuddin）などであった。そしてこの団体は、マレーシア全土の美術愛好者を統一すること、国民美術としての個性の強調、国民美術の獲得維持、国民美術とこの団体の重視のために国内外の美術団体との協働のために組織された。

この団体の美術表現の様式は自然主義、リアリズム様式に多分に影響されている。

主な作家の概略は以下である。
・モハメド・フセイン・エナスは1924年インドネシアのボゴール生まれで、1947年にマレーシアに移住した。マレーシア放送局のデザインチーフを勤めた。正式に美術の教育は受けておらず、1960年に一年間ロンドンに滞在し美術の独学を行った。作品は肖像画を主として厚塗りの油彩画を創作している。代表作に「Self-portrait」(1958)「Gadis Melayu」(1959) 等がある。
・マズリ・マット・ソム（Mazli Mat Som）は1938年にクアラルンプルに生まれ、1959年からこの団体に影響を受けた。彼の作品は、肖像画、日常を表現する生活画、物語絵画などに分類される。どの作品にも背後に日常的な物語を感じさせるテーマを扱っている。代表作に「Yati」(1964)「Menanti Nelayan」(1965) など。

(3) 木曜美術会

この団体は、クアラルンプルの美術家の水曜美術会の成功を見て、1957年にペナン島で結成された。組織の運営等は水曜美術会とほとんど同じである。この団体はロンドンに留学していた教員のタイ・フイキーがリーダーとなった。この団体には、アブドゥラ・アリフ、クオ・ジュピン、リー・ジューフォー、リム・トンジュエン（Lim Tong Juen)、ウイリアム・ラウ（William K.L.Lau）等が活躍していた。

最終的にこの団体は受け入れられず、タイ・フイキーは以前のペナン美術教師協会をペナン美術教師サークルとして1965年に再組織した。この団体の表現様式は印象派、後期印象派、表現主義、抽象表現主義に影響されていた。

主な作家の概略は以下である。
・タイ・フイキーは1910年生まれ。1948-51年ロンドン留学。西洋絵画の技法を基礎としている。

伝統的な構図や色彩により、風景、静物をキュビズム、表現主義などと融合させながら表現している。代表作に「Penang Road」(1957)「Plantscape」(1961)「Haji Ship」(1966) がある。
・アブドゥラ・アリフは1904年生まれで美術の修得は独学である。水彩絵の具による風景画の制作を行ない、1930年代から活躍し、60年代にはロンドンにおいて個展を開催している。代表作は「This Rich Land」(1960)。

(4) マレーシア美術家協会

この団体は1979年に組織された国立美術家協会を母体として、1980年にマレーシア美術家協会として発足し、国立美術館で最初の幹事会を開催した。この団体の目的はマレーシアの美術の発展を推進し、政府や他の国家の団体と協同してマレーシアの美術家の保護と改善を行うものである。そして最も重要な目的は、国家の精神や方向性を重視して美術が国家の発展計画の中の一つの要素となることであった。

この組織の会長はサイ・アハマッド・ジャマル、副会長にヨー・ジンレン、幹事にハム・ラベア (Ham Rabeah) が就いた。そして役員として、マズリ・マット・ソム (Mazli Mat Som)、アフマッド・カリッド(Ahmad Khalid)、ルザイカ・オマール・バズリー(Ruzaika Omar Basree)、ハシム・ハッサン (Hasim Hassan)、レザ・ピヤダサ、リー・キアンセン (Lee Kian Seng)、サイ・フード・アルハビ (Syed Hood Alhabhi) が務めていた。

主な作家の概略は以下である。
・サイ・アハマッド・ジャマル (前述)
・マズリ・マット・ソム (前述)
・ヨー・ジンレンは1929年ペラ州イポーに生まれ、1957年からイギリスのチェルシー美術大学、ロンドン大学に留学した。1962年から特別教員養成学院の教員となった。彼は留学経験者と共に国際的な影響をマレーシアの美術界に齎し、マレーシアに新たに洗練された表現を試行した。代表作に「Rice Field」(1963)「Light and Reflection」(1965) がある。
・レザ・ピヤダサは1939年にパハン州クアンタンに生まれ、1962年に特別教員養成学院に学び、その後、1963-67年にロンドン大学に留学している。帰国後はマラ工科大学で教員となり、その後ハワイ大学留学を経て、マレーシア科学大学の教員となった。作品はコンセプチュアルアートを主としている。図像と文字の混在によるコンセプチュアルな世界を表現している。代表作に「The Great Malaysian Landscape」(1972)「Entry Points」(1978) 等がある。

5 専門美術教育と教育課程

前述のマレーシアの美術活動の変遷でも触れたが、戦後の美術の発展には専門の美術教育機関の貢献がある。戦後のマレーシアの美術運動では、欧米を主とする留学経験のある美術の活動が活発になった。その基盤には自国の専門美術教育の存在があった。その主な教育機関は南洋美術学院、特別教員養成学院、マラ工科大学である。以下にこれらの概略を記す。

(1) 南洋美術学院 (Akademi Seni Nanyang)

南洋美術学院は現在のシンガポールに設立された東南アジアでは最も歴史のある専門美術教育機関である。1937年にシンガポールのセランゴン街に設立され生徒14人で出発した。第二次世界大戦中は閉鎖したが1946年にトーマス街に移転し、再開した。教員は中国で美術教育を受けた美術家が多く、中国画の様式を基本とした水彩画、油彩画の制作が見られる。1950年代に

は３年間の修学期間となり専門学院となった。その後の表現様式はヨーロッパの影響が多く、印象派、後期印象派、フォーヴィズム、キュビズム、抽象表現主義などの表現様式が多く、中国画の影響も少し見られる。

⑵　特別教員養成学院（Maktab Perguruan Ilmu Khas：MPIK）

特別教員養成学院はクアラルンプルのチュラスに1960年に設立された。現在は大学となっている。マレーシアには30弱の教員養成学院があり本院はその魁の一つである。この学院の美術教育は中等学校の教員養成を目的としている。教育目的は純粋美術と工芸の実践と理解を深めることである。専門として、絵画、版画、彫刻、陶芸、テキスタイル、手工芸、美術史、美術教育のコースがある。

⑶　マラ工科大学（Institut Teknologi MARA：ITM）

マラ工科大学は現在は総合大学（Universiti Institut Teknologi MARA：UiTM）となり、マレーシア全土に８つのキャンパスをもつ大規模な大学のひとつである。美術の専門は1967年に設置された。専門は純粋美術とデザインに大別され、ヨーロッパの教育制度が導入されている。

設立目的には（１）学生の創造力、想像力を育成し興味や個性を発展させる、（２）学生には社会に貢献する美術の人材として有用な仕事を準備する、（３）環境、文化、社会の変化に敏感な感覚を備え、その感覚を外在化する能力を養う、等が掲げられた。専門コースには、純粋美術、グラフィック、テキスタイル、金属工芸、インダストリアルデザイン、陶芸、ファッションデザイン、写真、美術教育が設置された。

以上がマレーシアの独立後から1970年代までの主な高等美術教育機関である。各教育機関での教育者については、また別の機会に記することにする。

その後、ペナンのマレーシア科学大学、スルタン・イドゥリス教育大学、クチンの国立美術大学などが設立され、新たな美術の状況に対応する教育が進められている。70年代までの専門美術教育機関においてはその教育課程はほとんどヨーロッパのカリキュラムを導入している。基盤となるものはバウハウスを初めとする美術と工芸、デザインの融合されたカリキュラムである。基本的にはバウハウスのカリキュラムが基盤となって新たな状況に対応しながら改編している。そこには２つの視点があると考えられる。第一には表現方法の習得のための視覚言語の導入である。そして第２に科学技術、情報処理技術の発展によるカリキュラムの改編である。

教員養成を含む高等専門美術教育の教育課程には、バウハウスを基盤とする美術、工芸の統合、芸術と科学の統合、デザインの開発という観点が重視されてきた。美術の内容がヨーロッパの旧来の枠組みの純粋美術の時代から社会や科学の発展によって拡大変貌を来たしているのである。それにより、教育課程は、単に純粋美術として絵画や彫刻のための美術アカデミーの教育内容から社会に対応する美術教育へと改編を遂げてきているのである。

マレーシアの独立前後の美術教育機関の魁である南洋美術学院は、現在はシンガポール国に設置され発展を遂げている。そこにおいても初期には中国からの美術家、主に中国画を習得した画家による教育から開始された。その後、第二次世界大戦を経て、マレーシア、シンガポールは植民地から独立し、独立国家として世界の仲間入りを果すのである。同時に、社会の近代化、現代化を進めるために人材の多くは宗主国であったイギリスへ留学したのである。その結果、美術表現も美術教育もヨーロッパの影響を受けたことは当然である。さらに時代が進み、

1970年代以降はアメリカへの留学生も増加し、欧米の影響と協調による社会の発展へと向かったのである。その結果、南洋美術学院もコンピューターによるデザイン、パフォーミングアート、インスタレーションといった現代美術の教育にも対応しているのである。しかし情操的教養的な美術としては、中国画や水彩画が根強く残っている。美術の機能には情操や教養としての受容があり、そこには民族の文化が基盤になる。マレーシア、シンガポールの民族構成に華人が多く占める状況からすれば、中国画の存在は大きく、また、南洋美術学院の教員、卒業生の多くが水彩画に親しんだことから1970年代までに中国画と水彩画が日常生活に受け入れられていた。

マレーシア独立後は南洋美術学院の卒業生がマレーシアの各地で活躍をした。その後、シンガポールが独立をしたこととマレーシアのブミプトラ政策の実施によって、変化が見られた。1965年のシンガポールの独立により、南洋美術学院はシンガポールを中心に活動することになり、マレーシアのみならず東南アジア、オセアニアへと視野を拡大して行ったのである。同時にマレーシアでは、1971年にブミプトラ政策が実施され、マレー人優先の社会を形成することになるのである。このことにより、マレー人の多くが留学の機会を政府から付与され、美術教育においても、欧米への留学生が急増したのである。多くは、イギリス、フランス、アメリカ、ドイツである。こうした留学経験者によって、前述のようなマレーシアでの美術家団体が結成され、伝統的美術である工芸から近代化、現代化による美術表現が進められていった。

ブミプトラ政策によって、美術教育ではマラ工科大学がその促進下にあり、教員、学生のマレー人優先制度が進み、事実上、中国人の締め出しが行われた。1980年代以降はマラ工科大学はマレー人による発展を遂げ、華人は私学、あるいは自費による留学によって美術教育への寄与を果した。

一方、教員養成においても、近代化、現代化によって変化が見られる。アジア諸国の多くは植民地化により宗主国の社会制度、教育制度がインフラ整備として進められ、独立後もその制度が基盤となっている。マレーシアの美術教育の教員養成は全国に30弱存在する教員養成学院とスルタン・イドゥリス教育大学によって教育を軸とした美術教育が実施されている。また、マラ工科大学、マレーシア科学大学、国立美術大学などの美術専門大学では美術内容を軸として一部に教員養成がなされている。

美術教育の教員養成の魁はクアラルンプルの特別教員養成学院である。教育課程は前述のように美術、工芸、デザインの統合によるカリキュラムである。しかし、マレーシアの初等教育、中等教育に対応するために、伝統的美術である工芸が重視されている。また、マレーシアの教員養成は計画養成でありナショナルカリキュラムによるコアカリキュラムを採用しているので、全国の教員養成学院の教育内容はほとんど同一である。また、中等教育においてはその教育課程で造形要素と造形原理、視覚言語が重視されているので、バウハウスやロシアのヴフテマスで系統化された視覚言語による造形表現方法を基礎としている。そして視覚言語によってマレーシアの伝統的美術を分析したり、現代的なデザインへの対応をしたりしているのである。

このような美術表現や美術教育に視覚言語を導入したことは、多くの留学経験者が欧米の表現様式を齎し、美術の創造性のための手段として視覚言語を活用したことによると考えられる。また、視覚言語はすべてが世界共通ではなく、民族や国家、地域の伝統文化との関連から特殊性を保持することができる。伝統的美術文化と欧米の美術文化の融合や、創造的表現のために視覚言語を有効に活用しようとしている。そのことはマレーシアの独立後の美術家の貢献によるところが大であると考えられる。

注

1　拙稿　「マレーシアにおける新しい美術教育課程について：初等美術教育の事例」（山口大学教育学部研究論叢56）　2007

拙稿　「マレーシアの美術教育とその背景について―中等美術教育における視覚美術教育を中心にして」（大学美術教育学会誌39号）　2007　等にすでに報告している。

2　マレーシアの美術家と美術運動の変遷については、主として以下の文献に基づき、概略を述べる。

・Hassan Mohod Ghazali"Pendidikan Seni KBSM Tingkatan 4＆5"Pustaka Delta Pelajaran Sdn Bhd 1997

・T.K.Sabapathy, Redza Piyadasa "Modern Artists of Malaysia" Dewan Bahasa dan Pustaka Ministry of Education Malaysia 1983

・National Art Gallery Kuala Lumpur, "Masterpieces from the National Art Gallery of Malaysia" Balai Seni Lukis Negara 2002

3　Hassan Mohod Ghazali"Pendidikan Seni KBSM Tingkatan 4 & 5"Pustaka Delta Pelajaran Sdn Bhd 1997　p.196

参考文献

・Hassan Mohod Ghazali"Pendidikan Seni KBSM Tingkatan 4＆5"Pustaka Delta Pelajaran Sdn Bhd 1997

・T.K.Sabapathy, Redza Piyadasa "Modern Artists of Malaysia" Dewan Bahasa dan Pustaka Ministry of Education Malaysia 1983

・池端雪浦、生田滋　「東南アジア現代史Ⅱ」　山川出版社　1977

・後小路雅弘、黒田雷児　「アジアの美術：福岡アジア美術館のコレクションとその活動」　美術出版社　1999